

氏名（本籍）	陳建志（台湾）
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第7010号
学位授与年月	平成26年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	趙孟頫の書法における時期区分の研究

主査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	菅野智明
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	岡崎昭夫
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村伸夫
副査	大妻女子大学教授	博士（文学）	松村茂樹

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、中国の元時代に活躍した能書家である趙孟頫（1254～1322）の書法について、その作風の年代的な変遷を遺品の形態ごとに跡付け、それぞれの変遷において転機となる時期を明らかにすることを目的とする。更に、広く中国書法史を視野に入れた場合に、変遷の画期として位置付けるべき、最も重要な転機の年代を導こうとするものである。

（対象と方法）

主として趙の肉筆書法の遺品を対象とし（贋作の疑いが残るものは除く）、これに加え拓本として伝存する遺品も補助的に適宜用いている。その考察は、有紀年の遺品を時系列に整理し、書法上の種々の観点を据え、分析的にその転機を導く手法による。また、そのための予備的検討として、伝存遺品の真贋の問題も扱い、更に趙の書作に関わる人的・文化的な影響の問題も勘案する。

（結果）

本研究は、最終的に以下のような結論を導いている。

趙の書法は、その形態の種類により、作風の変遷のあり方は異なる。碑文書法については、6期に区分し得る変遷があり、同様に小楷書法では3期、行草書と章草の混用書法では3期、四書体の混用書法では4期に区分し得る変遷が認められる。その中でも、碑文書法の第3期（趙50～52才頃）と、四書体混用書法の第4期（66～68才頃）には、広く中国書法史を見渡しても、画期的な転機が認められ、ここに趙の革新的な書法が創出されている。

（考察）

上記の結果を導くため、本研究では以下の各章により、各論的な問題を考察している。

先ず序章では、従来の研究成果を回顧し、本研究における主たる問題を提起するとともに、研究方法と本論の章構成を示している。

第1章では、趙の碑文書法（碑誌の銘文の稿本も含む）を対象とし、その作風の変遷が、6期に区分し得ることを提示している。特に、第3期（趙50～52才頃）の遺品が、重要な画期となることを、趙の閲歴（大都・済南への出仕と江南への帰還）や鮮于枢との交友など、その書作環境も絡めて論じている。

第2章では、趙の小楷書法に焦点を当て、その作風の変遷が、3期に区分し得ることを導くとともに、その変遷が、第1章で明らかになった碑文書法の画期と密接に関わることを提示している。この章では、従来真贋に定説を見なかった趙の小楷の遺品7点について、予備的に検討を加え、これを贋作として検討対象から外している。

第3章では、行草書（この際の草書は今草）に章草体をまじえる特異な雑体書に注目し、その変遷が3期に区分し得ることを導きつつ、特に晩年の60才以降を確立期として評価している。また、この混用書法が、中峰妙本に宛てた尺牘に散見することを指摘し、それが特定の場面で形成された可能性を示唆している。

第4章では、前章の成果を踏まえ、趙の書法における行・（今）草・章草に楷書をまじえる、四書体の混用書法を対象に、この混用書法が4期の変遷を辿ることを導いている。中でも第4期の最晩年に書かれた「嵇叔夜与山巨源絶交書」が傑出した成果であるとし、一部の無紀年の遺品についても、その熟達した四書体混用書法から、最晩年の成果であるとの見通しを示している。

第5章では、趙の専帖である『宝雪斎趙帖』を対象に、その所収作例が、いずれも真跡に基づくものとし、そこにおいて上記の「嵇叔夜与山巨源絶交書」とともに刻帖化されている「勉学賦并序」も、最晩年の四書体混用書法の傑作と見做している。

終章では、以上の各章の検討結果を総括し、上記「結果」の知見を提示するとともに、本研究の限界や課題についても言及している。

審査の結果の要旨

（批評）

従来の趙孟頫書法研究にあつては、その遺品の形態的な種別に与せず、概括的に3期もしくは4期の変遷を唱える説が支配的であった。本研究が、趙の書法の多面性を重視し、遺品の種別に応じて異なる変遷過程を跡付けた点は、趙の書法研究における飛躍的な進展として銘記される。この際、各種書法の変遷は、全てが不揃いの転機ではなく、本研究が中国書法史を視野に入れた上で画期と定める50才代前半の書法と、最晩年の60才代後半の書法には、遺品の種別を超えて共通する転機も認められ、そのことは、この2期に傑出した書法の創新を認める根拠ともなっている。

本研究は、こうした独創的な見地と豊富な遺品の分析のもとに、趙の書法に新たな解釈を提示した点が特筆されるが、一部の遺品について、真贋の問題にも踏み込み、多角的な視点から鑑定を試みている点にも意義が認められる。もとより、本研究では多数伝存する趙の遺品全てを鑑別することが目的ではないが、本研究で試みられた手法は、今後、鑑別を中心とした基礎的な遺品研究に資するところが大きい。

また、本研究では、趙をめぐる文化的な環境の視点においても、先行研究に見過ごされてきた新

しい史料を提示し、それらはいずれも有力な傍証となっている。上記の2画期を見定めるに際しては、更に趙の置かれた往時の環境を考究する余地も残すが、そのことは上述した本研究の意義を損ねるものではない。総じて趙の書法研究における本研究の功績は高く評価できる。

平成26年1月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。